

Version

1

産業日本語研究会 ライティング分科会

日本人ビジネスマンのための書き方読本（理論編 試作版）

考える大人の 書き方読本

産業日本語研究会 ライティング分科会

日本人ビジネスマンのための書き方読本

© 産業日本語研究会 ライティング分科会

〒135-0016

東京都江東区東陽4丁目1番7号

佐藤ダイヤビルディング 6階 (Japio 内)

目次

CHAPTER1 ビジネス文書と書く目的	1
ビジネス文書	1
構成心得	2
書き方を選ぶ.....	2
筋書き(アウトライン)	3
段(パラグラフ)イメージ	4
物事の表現の意味を選ぶ	5
CHAPTER2 書き手の役割と叙述	8
書き手の役割	8
動きの創造.....	8
2つの動き, 位置変化と質変化	10
動きのモデル.....	11
表現心得	12
「～がある」と「～である」の使い分け.....	12
出来事表現の使い分け.....	14
視点の表現法	15
叙述のための表現法	17
物事を限定する表現法	18
CHAPTER3 書き手の態度と確からしさ	21
書き手の態度	21
合理的な態度.....	21
合理性を支える確実性.....	22
思惟心得	23
思惟(推論)の方法を選ぶ	23
確からしさの根拠を選ぶ	24
伝達の戦略と表現法.....	25
主語と主題の選び方	25
おわりに	26

ビジネス文書と書く目的

ビジネス文書一本書き方読本(マニュアル)が対象とするビジネス文書は、読み手の行動変容に結びつく文書です。

情 報が昼夜間断なく流通し、人の行動データが資源である昨今、コミュニケーションが介在するビジネス領域では「ことば」の重要性が増しています。例えば、新しい事業提案を想定しましょう。社内向けに事業を説明する文章と、社外向けに新事業を公表する文章では、その表現の様は違います。社内の人の役割行動なのかー例えば、市場に投入する製品開発に関わるのか、社外の人への購買行動なのかー例えば、市場に出回る製品の中の何れを購入するのか、といった期待行動の違いです。相手(読み手)が違えば、表現方法も異なります。

読み手の行動変容

ビジネスには事業目的があります。コミュニケーションが介在するビジネス領域の事業目的は、相手(読み手)の行動変容が目的です。人は信念に基づき行動しますから、行動変容は信念の変転に拠ります。

もう少し信念と行動変容の間の関係を辿ると、行動は予想や推定のもとに為されるもので、予想や推定は、思惟(推論)に拠ります。思惟(推論)は、既知のことから未知ことを知ることです。既知のことは信じている事柄で、そのうち証拠づけられている事柄が知識と呼ばれます。信念状態が改まる(変転すること)で、因果の関係は変化します。そして結果に違いが生じることで、目標状態が変じて、行動の変容に結びつきます。

ビジネス文書

ビジネスは、経済行為を表す用語です。経済行為に関わる文書はビジネス文書です。とはいうものの経済分野と規模からビジネス文書全般を扱うことなど、とてもできませんから、本書き方マニュアルが対象とするビジネス文書は、コミュニケーションが介在するビジネス領域に絞ります。この範囲の文書の特徴は読み手の行動変容に結びつくことです。ビジネス文書を書く目的は、読み手の信念を変え、その行動を変容させることです。

思惟の留め書

本書き方読本(理論編)は、諸々の文章表現規則を具体的に指南する技能本ではありません。例えば、主語や目的語を省略するとか、トピック文を中心に支持文を書け、あるいは論理的に書け、などを列挙するノウハウ本ではないのです。表現について書き換えを細かく指示する規則集でもありません。

本書き方読本では、類書膨大なビジネス文書の書き方の技能本やノウハウ本にある内容記述の背景の考え方を説明します。コミュニケーションを通じた信念形成に懸る、人の思考過程や思考様式について、気づきを促すことです。つまり心得が明らかになります。

本ライティング分科会が提案する思惟の留め書は、思惟作法を意識した内容作成を支援する心得です。3 つあります。構成心得、表現心得と思惟心得です。それぞれ、話しの道筋と表現の関わり、書き手の役割と叙述の関わりと、ものごとの確からしさと内容表現の関わりに対応しています。

- 構成心得:話しの道筋と表現の関わりに気づくこと
- 表現心得:書き手の役割と叙述の関わりに気づくこと
- 思惟心得:ものごとの確からしさと内容表現の関わりに気づくこと

それぞれのことがらは、独立した概念ではなく、相互に関係します。例えば、表現特徴の説明を抜いて文書の構成を示すことができませんし、思惟の違いは、表現の類型に現れます。そのため、以下の 3 つの心得を説明する中では、その説明が前後したり行き来したりします。予めご勘弁ください。

なお、構成心得は、本チャプター内で表します。表現心得は、チャプター2において、書き手の役割を述べた上で、叙述の仕方を細かく説明した後に示します。思惟心得は、チャプター3 で、書き手の態度と信念の関わりを説明した後に説明します。

構成心得**書き方を選ぶ**

文章表現を用いた信念の変え方には 2 つの型があります。説得型と共感型です。

説得型, 共感型

説得型は、相手(読み手)の見解を変えることを目的とする文章に向きます。書き手は読み手に対峙し、合理的な態度で結論につながる関係の連鎖を明らかにし、想定される反論を雲散霧消させることで信念を変転させます。例えば、科学論文、単視点の企画文章や説明文書などです。

共感型は、皆(書き手と読み手)の意志を統一することを目的とする文章に向きます。書き手は読み手と共調し、合理的な態度で結論につながる関係の尤もらしさを認め合います。例えば、広告文章、多視点の企画文章や説

明文章などです。書き手と読み手の間の関係で言い換えると、説得型は対峙型と呼ぶことができ、共感型は共調型と名付けられるでしょう。

なお単視点であるとは、事業目的を取り巻く状況に精通している読み手を意識することを指します。多視点であるとは、単視点でないこと、つまり事業目的についての利害が絡み合う読み手に留意することをいいます。例えば、同業者向けに製品説明を施す文章は単視点です。それに対して一般市場に向けて製品を紹介する文章は多視点です。

筋書き(アウトライン)

論の展開の仕方のパターンは筋書きです。説得型と共感型の段の筋書きの概略を示します。周知のように「起承転結」は、中国の漢詩における絶句の形式に由来するもので、両型の左端は「起承転結」の「句」名称です。

直列的連鎖の筋書(説得型)	
起	「～がある」(データを示す)
承	根拠に訴求力を持たせる
結	確定的に結論を主張する

並列的連鎖の筋書(共感型)	
起	「～である」(立場を示す)
承	関係に訴求力を持たせる
転	視点を変えて問い直す
結	尤もらしい関係を主張する

「起」

「起」の部分は、段の開始部分で、導入の文(群)で表します。読み手の注意を喚起し、文章を読み続けてもらう工夫をします。説得型の段の場合、意識して「～がある」と表現します。知覚を通じた経験や体験を拠り所として、モノが在ることを述べます。(その外形に注目して、見て在ることが分かる)データを用いることは便利な方法です。モノの表現は外形特徴を目立たせる意味内容(意義)を持ちます。共感型の段の場合、「～である」と表します。認識を通じた経験や体験を拠り所として、モノが在ることを語ります。(その役割に着目して、役目や用途が在ることが分かる)立場(立ち位置としての視点)を示すことはよい方法です。モノの表現は役割特徴を際立たせる意味内容(意義)を持ちます。いずれの型も、それらモノの存在を根拠として主張します。

「承」

「承」の部分では、「起」の部分で主張した内容を支持する事柄を表現します。説得型の段の場合、段(パラグラフ)イメージで説明したように、直線的な時間を想起して、時間順序や因果順序で出来事を並べ、「ここ今」から「より後」(今から未了・近未来へ向かう)を描く表現を使います。共感型の段の場合、視点毎に出来事をまとめて表し、「より前」から「ここ今」(今から完了・近過去へ遡る)を説く表現を用います。

「転」

説得型の段にはなく、共感型の段にある筋書要素が「転」です。この部分の役割は、読み手が気付かなかった視点(論点の見方)を与えることです。良

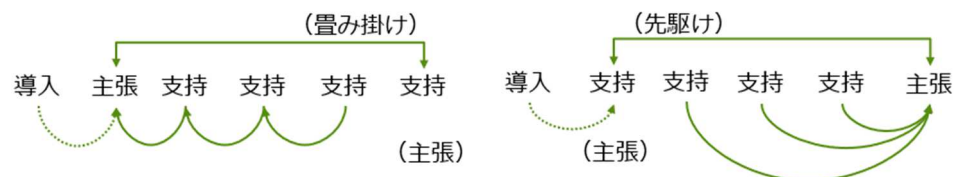
い意味で読み手を驚かせること(視点の気付き)が、信念の変転につながり、より文章内容への共感を高めます。例えば、謎掛けは言葉遊びとしての視点導入の例です。

「結」

「結」は段を終える部分です。説得型の段では、時間順序や因果順序に従った出来事連鎖の最後の結果状態に至ります。この結果状態が主張内容と符合しなくてはなりません。符合することが読み手の説得につながります。畳み掛け手法を使って読み手に再認識させてもよいでしょう。読み手の読後感にくどさを印象付けるかもしれませんが、信念が変転すればよいのです。共感型の段では、視点毎に出来事をまとめて顕すことで、主張する結果に至る関係の存在を示します。この関係存在の確度の高さが読み手の共感につながります。先駆け手法を使って関係存在の伏線を張ることができます。読み手には、わざわざらしいという読後感を持たれるかもしれませんが、信念が変転すれば良しです。

段(パラグラフ)イメージ

表現される文章は、導入の文(群)、主張の文及び主張を支持する文(群)から成るとします。そうした前提のもとで、説得型と共感型の段(パラグラフ)イメージ(観念図)を示します。



上の左の図が説得型の段イメージです。右の図が共感型の段イメージです。前者は、導入文(群)の直後に主張文を置きます。文章の最後に主張文(群)の内容を繰り返すこともあります。これを畳み掛け手法といいます。後者は、文章の最後に主張文(群)を置きます。導入文(群)の直後に主張文の内容を予め表すこともあります。これを先駆け手法といいます。

直列連鎖, 並列連鎖

上記のイメージ図から連想できるように、説得型の段で表現する支持文(群)は、直列連鎖の関係を保ちます。概略して直列的とは、直線的な時間を想起して、時間順序や因果順序で関係表現を並べることをいいます。共感型の段で表現する支持文(群)では、離散的な時間を想起して、視点毎に並列させて関係表現をまとめることをいいます。

参考イメージ

文の直列連鎖のイメージは、同時同図法の絵の連鎖に似ています。下記の聖書物語の絵群です。時点を連結することで絵群ができあがります。これに対し、異時同図法という描き方がありません。異なる時間を一つの背景図や構図の中に描き込む手法です。離散的な時間を想起して、視点毎に絵を並列させ、空間を

連結してひとつにまとめます。並列連鎖のイメージです。映画型と漫画型と言い換えられるかもしれません。



同時同図法の例 「聖書物語」

(© みやしたはんな いのちのことば社 2006 豆カード)

<http://hannah.webcrow.jp/seisho/seisho08.html> のイラスト画像を掲載)



異時同図法の例 「鳥獣戯画」

(ウィキペディア から「第 16 紙後半 - 第 18 紙」)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%B3%A5%E7%8D%A3%E4%BA%BA%E7%89%A9%E6%88%AF%E7%94%BB> の画像を掲載)

物事の表現の意味を選ぶ

説得型の文章では、意識して「～がある」と表現します。知覚を通じた経験や体験を拠り所として、その外形に注目し、見て在ることが分かるモノ(外形存在, 個物)として述べます。モノの表現は外形特徴を目立たせる意味内容(意義)を持ちます。例えば、「多くの日本人が英語が苦手だ。」と表現します。個物は数え上げができ、それが全体(集合)を表します。豊富な類別詞(「匹, 頭, 人」など)を使って、「三匹の猫」のように言い表します。個物は要素として概念化されます。要素は集合を作ることができます。

これに対して、共感型の文章では、「～である」と表します。認識を通じた経験や体験を拠り所として、その役割に着目し、役目や用途が在ることが分かるモノ(役割存在, 代物)として表します。モノの表現は役割特徴を際立たせる意味内容(意義)を持ちます。例えば、「なべて日本人は英語が苦手だ。」

と表現します。代物は数え上げができませんが、全体(総体)があります。視点を使って、「金に困っている彼」のように代物を表現できます。代物は多様体として概念化されます。多様体には集合概念がありません。

一般化概念

個物(外形存在, 下の左図の猫)は数え上げることができ、集合を作ることができます。全称文を作ることができます。総体は全体集合ですので、総体としての傾向は、典型的な形姿など「知覚のらしさ」が代表し、これが一般化された概念です。この概念は総称文で表すことができます。例えば、英語の可算名詞の無冠詞複数形の意義を思い浮かべるとよいでしょう。

対して、代物(役割存在, 下の右図の猫)は数え上げができません(全称文を作ることができません)が、全体(総体)があります。総体の傾向は「内実のらしさ」で表され、おおよそ衆目(十目)の一致するところが一般化された概念です。この概念は、総称文で表すことができます。例えば、「猫」の一般化概念は(擬態語で表すような)「にゃんにゃん」とか「もふもふ」でしょう。



図1 個物の「猫」

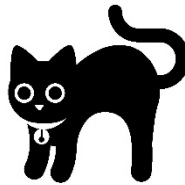


図2 代物の「猫」

指示と共有, 固有

指示することの必要性は、書き手と読み手の知識共有にあります。物事を実在化することばで表すと個別のモノになります。個別のモノを書き手が知り、読み手が知らないとき、個別の物事は不定であると(言語学で)いいます。不定の個別のモノをその後、読み手が知り得ると、個別のモノは定の意味になります。固有とは、皆が知っている物事で、不定・定の区別をしない個別のモノです。

個別のモノには、「～がある」で表す個物と、「～である」で表す代物がありますから 2 つの不定・定があって、それぞれ指示の仕方があります。前者は、外形存在として書き手と読み手の間で知識共有されると定の意味となり、後者は、役割存在として知識共有されると定の意味となります。

個物(外形存在)を指示する際は、「これ、それ、あれ、どれ」などの照応表現を用います。固有は、知覚を通じた経験や体験を拠り所として、実在が一つであること、すなわち唯一性をいいます。「富士山」は日本に只一つ在る山です。

代物(役割存在)を参照する際にも、照応表現を使います。固有は、認識を通じた経験や体験を拠り所として、性質が一つであること、つまり独自性をいいます。「富士山」は日本一と称される山です。

不定・定と文法形式

英語では、不定・定を表すために不定冠詞と定冠詞という文法形態が用意されています。中国語では、数量詞の「一」と類別詞を組み合わせ、不定の意味を表します。例えば「我家有一只猫。」（“There is a cat in my house.”）のようです。

a/an や「一」など、数え上げの概念で不定を表すのは、その外形に着目し、見て在ることが分かる個物（外形存在）を实在物と見做すからです。日本語は代物（役割存在）で物事の实在を表す傾向が強く、そのため日本語は、不定冠詞や定冠詞のような文法形式を持ちませんし、中国語から導入した類別詞も、モノを個物化して数え上げるためだけに使っています。

これまで「～がある」、「～である」を天下りで用いてきました。また主語と主題の表現選択や叙述することも大切な話題です。これらの話題は、表現心得(12 ページ)や思惟心得(23 ページ)で行います。

次第に表現が多様になります。次のチャプターで表現の多様さの背後にある書き手に役割を取り上げます。叙述の仕方を細かく説明した後に表現心得を示します。

書き手の役割と叙述

書き手は、複数の役割を担う叙述者です。基本の叙述は、具体行為(動き)の表現にあります。動きとは何であるかを理解することで、抽象化した行為の叙述にも目配りができます。

書き手の役割

書き手は、文章を通じて読み手の信念を変転させ、読み手の行動変容を引き起こします。文章を表現することは叙述の営みです。叙述内容を区分すると、(1)書き手が体験した具体行為(動き)の叙述、(2)書き手が認識した思考行為(思惟)の叙述、(3)書き手が目的達成のために行う主張行為(態度)の叙述があります。

例えば、表現される内容について、(1)は、市場で経験したこと、市場の動向調査や研究したことなどです。(2)は、出来事や物事の関係性、推論行為や発想したり創造したりすることです。(3)は、自らの考えを表明することや証拠立てて論じることです。反駁することも含みます。

(1)から(3)のいずれの点でも大切なことは、合理的であること(“be rational”)です。合理的な叙述の仕方は次の章で扱います。その前に、動きの表現の本質を理解しましょう。(1)から(3)のいずれの行為も動きであり、動きの叙述の仕方には、2 つあります。モノが動く(位置変化)表現とモノが変わる(質変化)表現です。前者は「モノがある」表現に従属し、後者は「モノである」表現に依存しています。モノの見方で動きの表現が変化します。「モノがある」表現と「モノである」表現を意識し、表現を分けることが大切になります。

動きの創造

動きの叙述には動詞を使います。まず、日本語の「動詞」の定義(概念表現)を確認しましょう。『(a) 物事の動作・作用・存在をあらわし、(b) 終止形が「〜う」で終わる(開音節構造を-u 音で担う)自立語』です。これは性質表現です。

言語現象の観察結果が抽象化されたもので、何ら動きの本質を説明していません。

動きは状態の変化

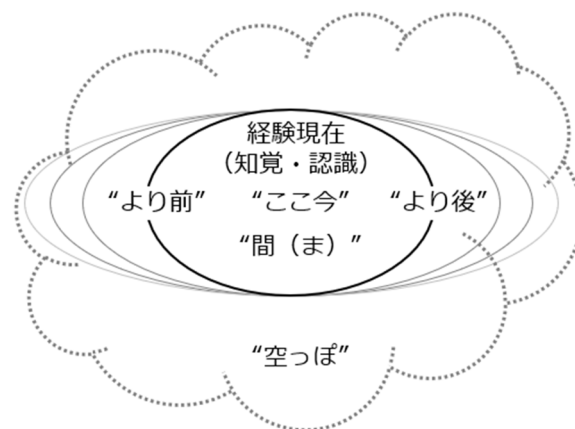
「動き」の定義は、「状態の変化」です。「状態の変化」を理解するには、状態を示すモノが分かることと、そのモノの変化を捉えることが必要です。そしてモノが在ることが分かるには、「空っぽを想起すること」が必要不可欠で、変化を捉えるには、「間(ま)を把握すること」が必須です。

空間と時間とは想像された概念で、これに対応して創造される観念は、それぞれ空っぽ(「空虚」)と間(ま)(「時間経過」)です。まず、空っぽが在ると見做してモノを見いだします。モノは外界世界を知る手がかりです。そして、間(ま)を掴み取るのに推論を用います。推論は「既知のことから未知のことを知ること」です。知っていることはモノとその状態です。ですから推論は、知っているモノと状態を使って、知らない間(ま)(「時間経過」)を解することです。

なお、2つの形式が推論にあります。「ここ今」の状態から「より後」の変化を知ろうとする推論と、「ここ今」の状態をもとに「より前」のことを知ろうとする推論です。前者は演繹推論と呼ばれ、後者は帰納推論とか仮説演繹推論といわれます。ここで大切なことは、演繹推論が時間経過として順行であること、そして帰納推論が時間経過上、逆行であることです。このように間(ま)は、方向性を持ちます。

経験する現在

次の図は解釈のためのイメージ図です。(存在すると思われる)時間と空間は、経験する現在です。私たちは外界を知覚し、知覚の各受容器の情報を認識することで「ここ今」を意識しています。記憶と推論のお陰で、ものごとの連鎖関係が把握できます。連鎖関係を辿ることで「より前」や「より後」が意識できます。



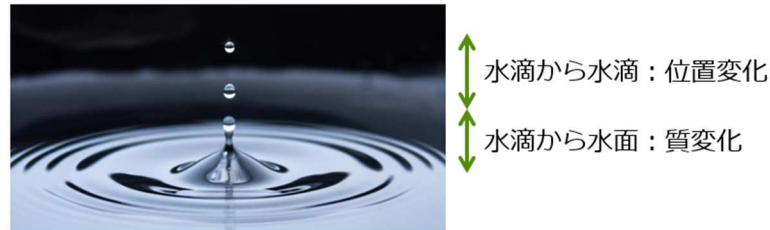
空間と時間は知覚できない

空間や時間はエネルギーでないので、我々生き物は、空間と時間を知覚できません。空間を見た人はいませんし、時間を感じた人もいません。私たちは、脳内表象である色というイメージを

通じて物を見ることができますが、空間を見ることができません。
時計を見て、実在はなく取り決めとしての時刻を確認することができますが、時間を感じることはできません。

2つの動き、位置変化と質変化

2つの動きの叙述の仕方，モノが動く(位置変化)表現とモノが変わる(質変化)表現について，その直感的な理解を促すイメージを示します。



図の水滴の落下は位置変化の動きです。水滴はさらに落下し、水面と接触し、そして同化します。これは質変化です。位置変化表現は、「水の玉があって、水の玉が落ちる。」です。質変化表現は、「水の玉であって、いずれ水に変わる。」です。動きの意味内容は、モノの意味内容に従属し、同時に相互に関係しあっていることが分かります。

その外形に注目して、見て在ることが分かるモノは「～がある」と表現します。知覚を通じた経験や体験を拠り所として、外形特徴を目立たせる意味内容にします。このモノの意味内容で表す動きの表現は、位置変化の様態を表します。説得型の段の書き方の基本です。

その役割に着目して、役目や用途が在ることが分かるモノは「～である」と表現します。認識を通じた経験や体験を拠り所として、役割特徴を際立たせる意味内容にします。このモノの意味内容で表す動きの表現は、質変化の様態を表します。共感型の段の書き方の基本です。

(「物事の表現の意味を選ぶ」(5 ページ)も参照してください。)

不動性と不変性

フランスの哲学者、H.ベルクソンは、時間が存在しないこと、さらに時間は流れたりもしないことを指摘し、唯々 不断の変化のみがあるのだと言い切りました。さらに、H.ベルクソンは「不断の変化に不動性と不変性を入れると都合がよい(無意識に誤謬を重ねると実体・実在が表象できる)」とも述べています。

- 不動性 (immobility) :モノは(外形を変えず)とある位置に留まる
- 不変性 (invariability) :モノは(役割を変えず)とある状態に留まる

こうしてモノの意味内容は、不動性由来の意味と不変性由来の意味に分けることができます。ソシユール的な視点では、言語は象徴的な記号表現と記号内容のあいだに恣意的な関係を持つ記号とされます。表意文字を使う言

語は、それほど恣意的でもないですが、それ以上に、記号内容(意義, 概念, 内包など)の割り当てには、(誤謬を通じて創作した)実体・実在を表象するため強い制限(不動性と不変性)があります。

動きの製作

H.ベルクソンは、「私たちは運動がいくつもの不動からなっているように推論します。運動を眺めてそれを不動で再構成するのです。(…中略…)しかし、変化についても同じことが言えます。」と説明します。モノを使って動きは再構成されています。動きは人による製作物です。よって動きを表象する動詞の意味は、言語を使う集団内の取り決めで作られます。

まず、時間経過(10 ページ)に対する思いを利かせてモノを把握します。この思いとは、H.ベルクソンが指摘したように、不動である、あるいは不変であるという信念です。不断の変化に不動性と不変性を持ち込むことで表象化したモノが、個物と代物です。

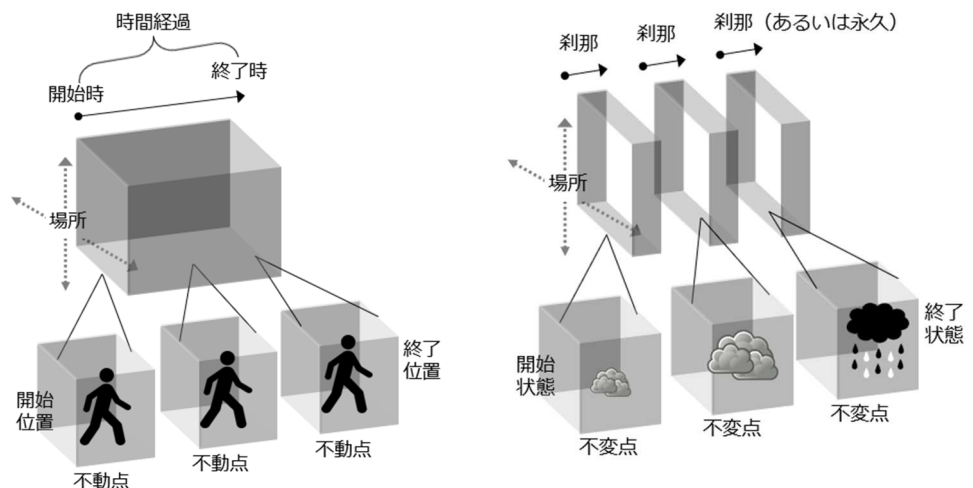
次に、状態の変化(9 ページ)に対する思いを利かせて動きを創造します。この思いとは、ひとつには、不動点には個物があり、それら不動点間には位置変化があるという信念と、もうひとつには、不変点には代物があり、それら不変間には質変化があるという信念です。前者の位置変化を表象化した動きは移動で、後者の質変化を表象化した動きが遷移です。

個物とは、それが位置変化しても、知覚的(特に視覚的)な観点で同一であることを判断することができるモノです。それに対して代物とは、それが質変化しても、認識的(特に推察的)な観点で役割が変わらないことが判断できるモノです。

動きのモデル

食パンモデル

モノと動きの関係をイメージ化した動きのモデルを挙げます。時空間は、4次元で描き切れませんから、モデル図では、2次元(「場所」)で3次元(各立体)を表しています。下の左図が不動点から作りだした動きです。右図は、不変点から創作した動きです。前者を(その形状の「らしさ」を根拠にして)食パン一斤モデルといい、後者を食パン一枚モデルといいます。



食パン一斤モデル(左の図)の各不動点に(まさに)在ると考えるモノは個物です。その外形に着目し、見て在ることが分かるモノです。实在論的観点からいうと、外形存在で、幾何存在とか知覚存在ともいえるでしょう。モノの存在(表現)空間は一つです。集団を作ることができます。表現空間内で、モノは「人がある」と表わされます。

食パン一枚モデル(右の図)の各不変点に(まさに)在ると見做されるモノは代物です。その役割に着目して、役目や用途が在ることが分かるモノです。实在論的には、役割存在で機能存在とか受容存在と呼ぶことができます。モノの存在(表現)空間が複数あります。集団を作ることができません。表現空間内で、モノは「雲である」と表現されます。日本語の名詞に単数と複数の語形区分がないのは、役割存在を表象しやすいからでしょう。

2つのモデル内の動きの特徴を以下の表にまとめます。

表1 2つのモデルと動きの特徴

モデル	食パン一斤モデル	食パン一枚モデル
動き	「ここ今」を位置(不動点)に変え、この位置から終了位置(不動点)までを個物が移動する。	「ここ今」を状態(不変点)に変え、「より前」の状態(不変点)から、この状態までを代物が遷移する。
動きの実現	「ここ今」の「今」から「より後」(時間経過上で順行)	「より前」から「ここ今」の「今」(時間経過上で逆行)
動きの出处	移動を引き起こす力	遷移に至る要因
動きの形質	開始—継続—終了	推移

表現心得

「～がある」と「～である」の使い分け

説得型の筋書では、食パン一斤モデルで特徴付けられた動きの表現を使います。このモデルでは、モノの存在(表現)空間は一つで、単一の空間に、直線的な時間を想起して、時間順序や因果順序で関係表現を並べることができます。周知のとおり日本語は、存在動詞を対象物の有生性で表現仕分けします。生きている類は「いる」を使い、そうでない類は「ある」を使います。こうしたことから「人がある」と表現しませんが、説得型を使う際には、名詞表現を「～がある」と意識して用いることを心掛けます。「人、匹、個、頭」などの類別詞を積極的に使うことも考えましょう。

共感型の筋書では、食パン一枚モデルにある動きの表現を使います。このモデルでは、モノの存在(表現)空間が複数であり、離散的な時間を想起し

て、視点毎に、表現空間を並列させて関係表現をまとめることができます。性質表現の「～である」では「～がある」のような制限はなく、気楽に使える表現です。それだけに出来事の生起の順序関係だけが意識され易く、名詞が表現されている空間連結の関係性が希薄になりがちです。例えば「飯を食って、風呂にはいる。」といった表現です。2 つの出来事の間、時間順序以外の関係性が希薄です。こうした表現は意識して避けるようにしましょう。

例えば、「彼女が行くから、ついでに家に送って(やって)くれ。」という並べ文は、主語である「彼女」が、「送る」の目的語であることからねじれ文と称されます。「彼女」に焦点があたっていることから空間連結の関係性が密であり、この表現を避ける必要はありません。ただし、食パン一枚モデルに依拠していることを意識しましょう。

創造される事態の形質

動きの形質¹(表 1)は、動きを表した際に時間経過に伴う変化の様として観察される性質を云います。位置変化(食パン一斤モデル)は、開始位置、終了位置とその間の動きがありますので、少なくとも 3 つの様態(相)が現れます。つまり、静止状態から動きだした様態、持続して動いている様態、そして持続状態から動きが停止する様態です。動きの表現は、複相事態を表すことになります。動きは、力の強さに拠って予測や予想ができる終了位置を見込んで、「ここ今」の「今」から「より後」の間に実現します。動きの実現は、例えば、「～に行く」のように、未来志向です。

それに対して、質変化(食パン一枚モデル)は、質の変化の違いを確認することで動きが実現します。1 つの様態(相)しかありません。動きの表現は、単相事態を表すことになります。動きは、遷移(移相)に至る要因を、「ここ今」から「より前」に遡って探り、幾つかの選択肢から尤もらしい要因によって動きが実現したと見做します。動きの実現は、例えば「～が腐る」のように完了志向です。

位置変化の典型的な動きのイメージを下図の左に挙げます。時(ま)は、意志(力)と目的の間の隔たり(連続的)です。これに対して、質変化の典型的な動きのイメージを下図の右に挙げます。間(ま)は、発端(要因)と共感(認識)の間の隔たり(離散的)です。離散であるのは、「ここ今」に至るまでの一定の間合いが見込めないこと、さらに要因が一つでないことに拠ります。

¹ 本来「形質」とは、生物が示し、遺伝によって子孫に伝えられる性質のことです。



例えば、「行って来ます。」の時間経過長は不定です。帰宅時間は、普段通りに夕刻かもしれませんが、早くなることも遅くなることもあるでしょう。ちなみに英語で「行って来ます。」は、“I’m leaving.”です。動きの始動から継続までを表しています。

出来事表現の使い分け

複相事態と単相事態

位置変化は移動です。開始時点(静止)があつて、とある経路を動き(移動)の後に終点(到達)に至ります。この位置変化は、知覚感覚できることが多く、始点から終点までを時間経過として追っていくことができます。この位置変化の典型的な動きのイメージを出来事として捉え直すと、この出来事は、動きが始まり、当該の動きが継続し、そして動きがおさまることを表します。動きの時間的な推移を相(アスペクト)と呼び、複相(三相)によって出来事(事態)が成り立つと考えることができます。

質変化は推移(状態遷移)です。変化の様を知覚感覚できないことが多く、例えば、常温に置かれた氷(固相)は、しだいに溶けて水(液相)に変わります。この変化に至る経過時間は温度に依存します。動きの始まりや動きの終了は知覚的にはっきりと確認できません。そのため知覚感覚だけでなく思考による非観察的な観点で、仮説検証的な(変化後の状態から変化前の状態を)推察をします。このような質変化の典型的な動きのイメージを出来事として捉え直すと、この出来事は動きの推移があること、つまり単相によって成り立つと考えることができます。

周知のとおり日本語は、動詞を連用形に変えて、動詞を後続させることができます。「食べ始める、食べている、食べ終わる」のような例です。動詞が連続するのは、日本語の動詞が単相の出来事を表し易いからなのですが、これらは複合動詞と呼ばれています。具体的な表現例に変えて、複相事態と単相事態の違いをイメージ図にして以下に示します。分かりやすいように、単相事態の表現として日本語の「食べ(ル)」を使い、複相事態の表現として英語の“(to) eat”を使っています。

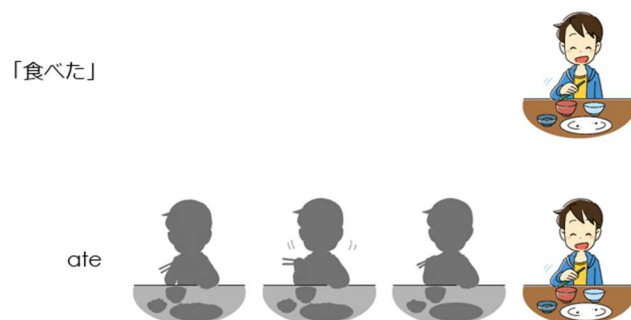
「食べる」は、動き(行為)として始まりや意図を表し、意識(認識)として予見や予期を表します。一方、“(to) eat”は、動きの始動と動きの継続、そして動きの収束を内在します。動き(行為)として完遂を表し、意識(意志)として目的を表します。



図から分かるように英語では複相事態を表現しやすいです。単相事態を表現しやすい日本語では、複合動詞の文法形式を使って「食べきる」のように、複相事態を表現することができます。なお、英語では、句動詞などの文法形式を使って単相事態に近い表現を実現することができます。例えば、“shoot”（「射貫く」）に対して、“shoot at”（「射る」）のようです。



開始と収束が意識できない“know”や“love”に進行形がないことは周知です。「～ている」は、「ある、いる」といった極少数の動詞を除き、ほとんどの動詞に後続します。このことから日本語の動詞が単相の出来事を表し易いことが分かります（複相の出来事を表せないのではありません）。



視点の表現法

外界視点と内界視点

叙述の視点には、動きの2つのモデルに対応して、2つのタイプがあります。その特徴を以下の表にまとめます。

表2 2つのモデルと視点の特徴

モデル	食パン一斤モデル	食パン一枚モデル
視点	外界視点(知覚的な時空間(外界)があって, その中に表現空間がある。)	内界視点(認識的な表現世界(内界)があって, その中に知覚的な時空間がある。)
視点推移	時空間全体を描写することが優先され, その中で位置変化の動きを連鎖させる。	複数の時空間の間の関係を描写することが優先され, 質変化の動きを連鎖させる。
時間経過	時間経過は, 単一の時空間に従属するので, 連続する線状の時間経過を想像する。	関係性が認められる複数の時空間が, 時間順序を維持するように並び, 離散の時間経過を想像する。
出来事配置	時間経過を線状と捉え, その線上に出来事を配置する。出来事の絶対的な前後関係を表す。	出来事生起の順序関係だけが維持される。出来事の相対的な前後関係を表す。

雪国

外界視点の表現イメージ(例文は, “The train came out of the long tunnel into the snow country.”, 下図の左)と, 内界視点の表現イメージ(例文は, 「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」, 下図の右)を示します。



視点推移の特徴から分かるように, 外界視点は説得型の筋書と相性が良いです。直列連鎖は, 位置変化の動きの連鎖でもあります。参考イメージにある同時同図法(聖書物語)のイメージ図も参照してください。

一方、内界視点は共感型の筋書に調和します。異時同図法(鳥獣戯画)のイメージ図も参照してください。この絵からは、時間順序を維持するように複数の表現空間が接続されていることが見て取れます。それぞれの表現空間毎に視点があります。

叙述のための表現法

動きのモデルに対応して、叙述の表現法には 2 種類あります。特徴を以下にまとめました。

モデル	食パン一斤モデル	食パン一枚モデル
表現法 (物事)	物事は誰にも知覚的に分かるように描く。 ・事物を個物(「～がある」)として表現する。表現空間内に只一つ知覚的に在る個物を唯一物として描く。	物事は誰にも認識的に分かるように描く。 ・事物を代物(「～である」)として表現する。表現空間内で只一つ役割的に在る代物を独自物として描く。
表現法 (出来事)	動きの開始から収束までを出来事として描く。 ・物事が力を発露し、あるいは力を受けて移動し、目的位置に達することを表現する。	動きの推移を出来事として描く。 ・物事が自ずと、あるいは関係性に従い、性質が変わることを表現する。

説得型の筋書きでは「～がある」、共感型の筋書きでは「～である」と表現することを述べました(5 ページ, 12 ページ)。表現法(1)にあるように、「～がある」と表現する書き方は、不動点由来のモノである個物(外形存在)の表象法です(食パン一斤モデル)。「～である」は、不変点由来のモノである代物(役割存在)の表象法です(食パン一枚モデル)。

「物事の表現の意味を選ぶ」(5 ページ)の内容を再構成することで、表現される物事の内容や観念の解釈の仕方を比較します。

モデル	食パン一斤モデル	食パン一枚モデル
個別(実在化)	個物(外形存在)	代物(役割存在)
集団(全称化)	個物集団のらしさ	ー(ありません)
総称(一般化, 抽象化)	知覚の「らしさ」を選好	内実の「らしさ」を選好

不定	知覚上, 読み手が意味を定められない(知覚盲状態)	認識上, 読み手が意味を定められない(視点盲状態)
定	知覚の「らしさ」で意味を定める	内実の「らしさ」(視点)で意味を定める

表現法(2)は、動詞を使う表現に関わります。食パン一斤モデルの場合は、知覚と位置変化を引き起こす(動力や因果)を想起して、「～が～して～に至る」や「～が～を～して～に変わる」と表します。文を連鎖させる場合には、前文が表わす動きの結果状態が在ること、その状態が次の文の前提になるようにします。

食パン一枚モデルの表象法の場合は、認識と質変化を引き起こす(感力や因縁)を想起して、「～が～になる」や「～が(～を)～して～になる」という表現を使います。基本的に関係を並列連鎖させ、結果状態に至る関係が在ることを示しますが、複数の文で一つの関係を表す場合もあります。

物事を限定する表現法

上記(叙述のための表現法)の中で、モノが不動点由来の場合、物事は誰にも知覚的に分かるように表現することを特徴として示しました。そしてモノが不変点由来の場合には、物事は誰にも認識的に分かるように表現することを特徴としました。

属性の在り方の違い

知覚的に分かる物事の属性は、知覚的実在物の特徴として、物事に内属する属性と物事を観察する側に在る(外属する)属性に分かれます。個物は、知覚判断を一応の判断基準として、内属属性と外属属性を意識して分けて、制限する表現を考えます。例えば、「日本一高い富士山」(高さは富士山の属性)と、「日本一綺麗な富士山」(美しさは愛でた人の思い)を意識することです。

一方、認識的実在物は、この区別が無いのではなくて、その区別をしません。代物は、認識判断に頼り、その属性が内属か外属かではなく、視点を明示することで属性制限をします。例えば、「色が赤いトマト」、「実が熟れたトマト」、「糖度が高いトマト」、「見た目が美味しそうなトマト」、「サラダにして食べると美味しいトマト」などです。

視点を省略した表現、例えば、「野菜がおいしいレシピ」(料理本のタイトル)、「サラダが美味しいトマト」(スーパーマーケットの説明表示)、「油断のできない空」(天気予報の説明)、「墓を掘った祟り」(社会生活上の行動規範)など普段よく使います。表現環境に埋め込まれている場合、ごく自然な表現です。ただ、表現環境が不明の場合には、読み手を意識して、冗長な表現になりますが、代物のどの相に焦点をあてるのか視点を明確に表します。

受動表現も自ずと違いがある

「彼女に泣かれた。」「同僚に営業ポイントを取られた。」など迷惑の受身といいます。自動詞にレル(ラレル)が後続する、「～を」が「取る」の対象物のままレル(ラレル)が後続しているなどの特徴があります。同じ文型の「社長に営業成績を褒められた。」は迷惑ではなく、ボーナスが期待できるなど、いわば感謝の受身です。個物と代物で示したように、モノの實在論的な意味が違うのですから、主語と目的語の交替としての受動表現、つまり英語の受動形の分析を参照して日本語を考えると不格好になります。共感型の特徴から日本語の受身もスマートに考えます。

受動や使役を動作・行為への働き掛けと定義します。働き掛けは二つあって、行為者(主体や評価対象(有情性のモノ))への働き掛けと、対象への働き掛けです。前者は使役と呼ばれ、後者は受動と呼ばれています。

受動についての解釈はこうです。日本語は「～が」で表現される対象が領分に入ることによって、働き掛けがあるという関係性を表現します。領分に入ったことは、「～に」を使う(視点を明示すること、動詞に「(ら)れる」を後続することで表します。分析的特徴は「～に」と「～(ら)れる」による語形変化のみです。ガ成分やフ成分は直接関係しません。領分内における対象(自領分の他者)の扱いについて共感度が関与し、意味を決めると解釈します。まずもって定義した共感度を使った解釈を以下の表に上げます。

共感の程度	表層の表現
密接な関係	(～は)～に死なれる
自分(同一者)	～が(～に)唄ばれる
肯定的関係	(～が/は)～を～に褒められる
否定的関係	(～が/は)～を～に盗まれる
中立的関係	(～が)～に食べられる

対象が被動するという意味の直接受身は日本語では、むしろ周辺の表現です。共感という感化に不介入一努めて視点を明ら

かにしない表現もあります。例えば「～と考えられる」「～と見られる」などです。



「川を下る。」(日本語の「～を」は付随対象です。英語の目的語は被動対象です。)

次のチャプターでは、書き手の態度と信念の関わりを説明した後に思惟心得を説明します。

書き手の態度と確からしさ

書き手は、具体行為の叙述を織り交ぜながら、合理的に思惟の道筋を正しく顯し、整合的に主張をします。そうして、読み手の信念を変転させます。

書き手の態度

発話時における話し手の心的態度、一ある出来事や状態が実際に起きているか、起きていないか、あるいは起きる可能性があるか、といった判断のことをモダリティといいます。この心的態度は信念から形作られます。例えば、以下のような例文の下線は心的態度を表します。

- (1) 「今頃彼は東京に着いているはずだ。」(“He should have arrived in Tokyo by now.”)
- (2) 「散らかしたままにはしないと約束するなら、キャンプしてよい。」(“You can camp in my field provided (that) you promise to leave no mess.”)
- (3) 「さらに霧が濃くなれば、飛行機はコースを変更するだろう。」(“If the fog gets thicker the plane may/might be diverted.”)

このように出来事や状態が実際に生起する可能性の判断表現をムードといいます。書き手の態度は、表現上、ムードとして文章に現れます。

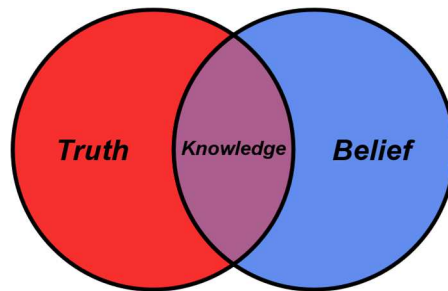
合理的な態度

信念と妄想

信念は、書き手が信じている物事の内容(形式知識としての記憶)や様子(イメージとしての記憶)です。これらは行動を支える意志の拠り所であり、思惟(推論)の根拠(原因・理由)です。物事を裏付ける証拠や確証の有無は問われません。真実と知識と信念の関係を表す図を引用して挙げます。

この図から分かるように、真実(真理)であることが信念でなく、知識(事実)だけが信念でありません。信念は物事の実在を確信していることがポイントですが、言語社会集団に受け入れられない確信は妄想です。『妄想とは明ら

かな反証があっても確信が保持される、誤った揺るぎない信念である。』(脳科学辞典)とされます。



信念の位置付けを表す図

(ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BF%A1%E5%BF%B5> の画像を掲載)

論理的であるとは、真実(真理)を基盤として、思考や論証の組み立ての道筋や形式に妥当性が保証されているということです。(図で分かるように)真実(真理)は、信念のうちの知識部分に限定されますから、文章を論理的に書くだけでは事足りません。冒頭で述べたように書き手の態度は合理的であるべきです(8 ページ)。

合理性を支える確実性

「百聞は一見に如かず」(“To see is to believe.”)とありますが、見間違いは起こるものです。周知のように深層学習を使った画像認識の誤り率は、人の認識の誤り率より低い(つまり優秀な)のですが、確実ではありません。(3 ページで)説得型の筋書においては、表現として「～がある」を使ってデータを示すことを説明しましたが、データは観測された値であり、観測には誤差が付きものです。

一方、共感型の筋書では、「～である」という表現を使って立場を表明することを述べました。立場は姿勢であり、姿勢は書き手の態度です。立場の見定めには、物事を見る観点や物事の認識に対する見解が深く関わります。観点や見解は努めて意識しないと、論を展開するうちに推移し、立場にぶれが生じてしまいます。このようにデータや立場を支えるいずれの観念(データや立場)にも確実性の度合いが付いて回ります(筋書の「起」、3 ページと物事の表現の意味、5 ページ)。

確率と蓋然性

確実性の度合いは“probability”です。“probability”の訳語は「確率」で、確率は、偶然起こる現象の、現象全てに対する割合です。現象が均質であることを前提として、繰り返し起こることから認識される考え方です。出来事や事態が起こる確率分布は統計的で、偶然的な過程は法則に関連しているという存在論的な考え方です。統計学でいう頻度主義の考え方です。

“probability”には、もうひとつの訳語に、「蓋然性」があります。この意味は、認識者に内在し、事柄(現象)が起こる確実性や、ある事柄が真実として認められる確実性の度合いです。確からしさとも言います。統計的な背景のない、出来事や事態が起こることについての合理的な信念の度合いが確率分布であり、認識論的な考えです。統計学でいうベイズ主義の考え方です。

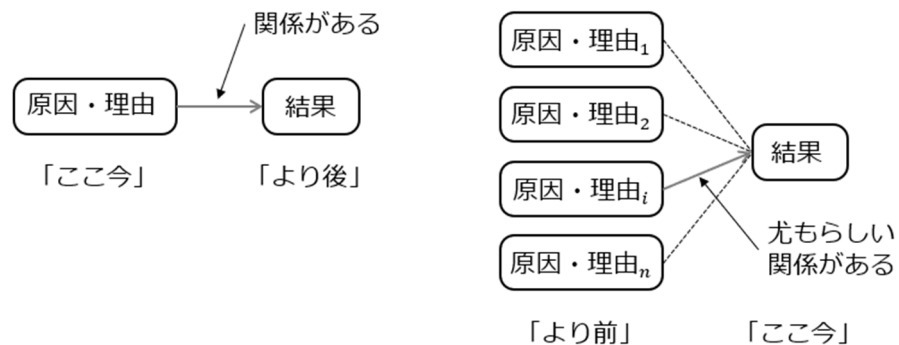
現象や事柄に対応する語、出来事、事態と命題は、言語学でよく見聞きする語です。それで出来事、事態と命題は、いずれも出来事は起こるかどうかが、事態が生起するか否か、命題が真であるかそうでないかについて確率とそのあり様をひとまとめでした確率分布、つまり確からしさを考えることができます。確からしさには、上記で述べたように二面性があります。書き手の態度は、物事の生起の確かさらしさであり、言語化されてムードとして文章に現れます。

思惟心得

思惟(推論)の方法を選ぶ

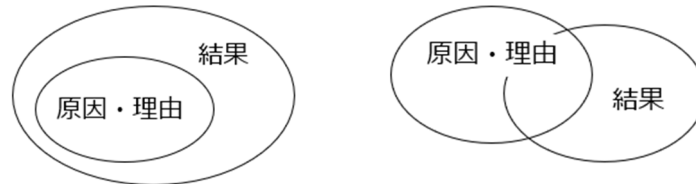
説得型の筋書きの文章では、読み手を説得する伝え方を用います。読み手に訳(わけ)を受け入れさせることです。思惟には演繹的な思惟(推論)を用います。具体的には、「原因・理由－結果」の関係が在ることを念頭に置いて、「原因・理由」が既知で、未知の「結果」(「より後」)を表現し、結論を示します(下の図の左側)。直接的な時間経過を想起して、時間順序や因果順序で出来事を並べ、「ここ今」から「より後」を描く表現に使います(筋書の「承」, 3ページ)。

これに対して、共感型の文章では、読み手の共感を得る伝え方をします。読み手に訳(わけ)を納得させるのです。思惟には仮説演繹的な思惟(推論)もしくは帰納的な思惟(推論)を用います。「結果」が既知で、複数の「原因・理由」を仮定し、その中から尤もらしい「原因・理由－結果」の関係(「より前」)を表現し、結論を示します(下の図の右側)。離散的な時間経過を想像して、視点毎に出来事をまとめて表し、「より前」から「ここ今」を説く表現に用います(筋書の「承」, 3ページ)。



分析的, 拡張的

演繹的な推論は, 原因・理由の内容に明々白々に, もしくは暗々裏に含まれている情報を解明し, それを結果として導き出す分析的な推論です(下の左図)。これに対して, 帰納的な推論は, 経験にもとづく推論であり, 経験的事実の世界に関する知識や情報を拡張するために用いられる拡張的な推論です(下の右図)。総合的推論とも言われます。仮説演繹的な推論は, 帰納的な推論によって(仮定としての)原因・理由を示し, 原理・理由から関係性の連鎖を辿り, 結果に達する方法のことです。

**確からしさの根拠を選ぶ**

説得型の筋書きの文章では, 「原因・理由－結果」の関係が在ることを念頭に置きます。「原因・理由」を既知と考えます。既知であることは, 物事が誰にも知覚的に分かるように描き(17 ページ), 「～がある」という表現を使います。合理的なデータと意志を強調しますが, それが在ることの根拠(確率分布)には, 物事は繰り返し起こること(頻度推定)と, 一般知識(定説や百科知識)を使います。

結果としての結論は, 原因・理由の確からしさを基に, 概念や観念の一般から個別へ絞り込むことで示します。なお, 個別性が凝縮した物事は唯一性として理解されます(確定記述です)。こうした考え方は, 単一空間や “universe” が在ること, その表象空間には従属して連続の時間経過が在ることを前提とします。

共感型の筋書きの文章では, 現況の「結果」を既知と考えます。この結果を尤もらしく説明する「原因・理由－結果」関係を選びます。「原因・理由」(複数)を可能性と考えますから, 物事は誰にも認識的に分かるように描き(17 ページ), 「～である」という表現を用います。合理的な立場と縁(えん)を強調し, 関係性の尤もらしさ(ベイズ推定)と, 常識知識(関係者に広く知られている知識)を使います。

結果としての結論は, (「原因・理由－結果」)関係の確からしさに基づいて概念化, 観念化の個別から一般に抽象化することで示します。なお, 個別性を求めると独自性に向かいます。こうした考え方は, 複数空間や “multiverse” という観念が在ること, その表象空間群には順序関係の時間経過があり離散時間が在ることを前提とします。

単一空間(universe)と複数空間(multiverse)

個物（外形存在）がある世界は、単一空間を想起します。universe という概念に近いイメージです。出来事連鎖は位置変化を起こす力や、因果、意志により引き起こされ、因果は恒常的なので、原因・理由があれば必ず結果は生じます。連鎖する出来事間の時間経過は連続性があります。世界や他と区別された自己(ego)があります。

代物（役割存在）である世界は、複数空間を想起します。multiverse という概念に近いイメージです。出来事連鎖は質変化を起こす力や、因縁、感力により引き起こされ、因縁は感化的なので、生じた結果から、それを引き起こした原因・理由を探ります。あらゆるものに活かされている中に生きている自己(唯我)があります。

伝達の戦略と表現法

説得と納得

伝達の戦略には、動きの 2 つのモデルに対応して、2 つの方法、物事の訳(わけ)を説得し、受け入れさせる戦略と、物事の訳(わけ)を納得させ、受け入れさせる戦略があります。その特徴を以下の表にまとめます。

モデル	食パン一斤モデル	食パン一枚モデル
伝達の戦略	物事の訳(わけ)を受け入れさせる。	物事の訳(わけ)を納得させる。
結論の概念	一般から個別	個別から一般
思惟の方法	前提(因果)があって、把握(原因・理由)の確からしさを背後にして、結論(結果)を示す。	把握(結果)があって、関係(原因・理由－結果)の確からしさを後ろ盾にして、結論(因果)を示す。

主語と主題の選び方

主語(力)と主題(場)

個物は位置変化し、主語は、位置変化を引き起こす力の源泉(因果、意志)を示します。代物は質変化します。主題は、質変化を引き起こす場(因縁、感力)を示します。

主語が示す概念や観念は、起点、動力因、目的含意であり、「～がある」と表します。位置変化(移動)表現を中心に、未来志向(時間順行)の表現を支持のために使います。説得型の筋書きを使い、表象空間は、決定論的で演繹的な思惟(推論)に対応する表現を用います。「より後」(将来や未来)が分かる人はいませんが、確からしさに則った信念で結果を指し示すことができます。

主題が示す概念や観念は、場、感化因、要因推定であり、「～である」と表します。質変化(遷移)表現を中心として、過去志向(時間逆行)の表現を支持のために使います。納得型の筋書きを使い、表象空間は、確率論的で仮説演繹的あるいは帰納的な思惟(推論)に対応する表現を用います。「より前」(完了時や過去)に若返る人はいませんが、記憶の確からしさを頼りにした信念で結果を説明することができます。

避けるべき思惟

説得型の筋書きでは、個別的な「原因・理由－結果」関係や、たみにしか起きない「原因・理由」の使用を避けます。意志に基づく関係(私の力で結果が得られること)や、個人経験(検証できない事実)などを使うことも憚られます。

共感型の筋書きでは、関係選択の際に尤もらしさの判断を惑わせたり、情動に偏った「原因・理由」を使ったりしないようにします。個人信念(色付け表現、感情表現など)を使ったり、既知の結果を歪曲したり(結果在りきに)しないことが求められます。

おわりに

冒頭(2 ページ)で書いたように、本書き方読本(理論編)は、諸々の文章表現規則を具体的に指南する技能本ではありません。文章は思考結果の発露なのですから、思惟作法に言及しないで、主語や目的語などの表出の有無だとか、トピック文を冒頭に書けとか、あるいは文章を論理的に書こうなどといえるはずはないと考えています。

書き手と読み手のコミュニケーションを通じた信念形成に懸る、人の思考過程や思考様式について、気づきを促すことです。つまり心得を明らかにしようと思いました。

ビジネスにおける事業には訳(わけ)があります。その訳、事業目的は、相手(読み手)に卒なく的確に伝わらなければいけません。訳を説得するにしても、あるいは訳を納得してもらうにしても、訳が伝わることで、読み手の信念も変転するでしょう。延いては読み手の行動変容につながります。

産業日本語研究会 ライティング分科会・書き方心得は、文章表現の背後にある思惟の根本を説明します。このゆえに心得を理解すれば「道を得、通を起こす」ことでしょう。まことにこれビジネス文書の有耶無耶を照らす明燈です。深く受容し実意に身につけましょう。

参考文献

- DIAMOND ハーバード・二次ネスレビュー編集部編・訳. (2006). 説得の戦略. ダイヤモンド社.
- S.I.ハヤカワ著, 大久保忠利訳. (1985). 思考と行動における言語 原書第四版. 岩波書店.
- W・G・ライカン著 荒磯敏文, 川口由紀子, 鈴木生郎, 峰島宏次訳. (2005). 言語哲学 入門から中級まで. 勁草書房.
- アンリ・ベルクソン著 杉山直樹訳. (2019). 物質と記憶. 講談社学術文庫.
- アンリ・ベルクソン著, 原章二訳. (2013). 思考と動き. 平凡社.
- イアン・ハッキング著, 広田すみれ・元良太訳. (2013). 確率の出現. 慶応義塾大学出版会.
- ウンベルト・エコ著, 谷口伊兵衛訳. (1997). 記号論 記号概念の歴史と分析. 而立書房.
- エリオット・ソーバー著, 松王政浩訳. (2012). 科学と証拠 統計の哲学入門. 名古屋大学出版会.
- エルンスト・マッハ著 野家啓一編訳. (1997). 時間と空間. 法政大学出版局.
- エルンスト・マッハ著 廣松渉編訳. (2002). 認識の分析. 法政大学出版局.
- カール・R・ポパー 大内義一他訳. (1971). 科学的発見の論理(上). 恒星社厚生閣.
- カルロ・ロヴェッリ著 富永星訳. (2019). 時間は存在しない. NHK 出版.
- スティーブン・マンフォード、ラニ・リル・アンユム著, 塩野直之 谷川卓訳. (2017). 哲学がわかる因果性. 岩波書店.
- デイヴィッド・ドイッチェ著, 林一訳. (1999). 世界の究極理論は存在するか 多宇宙論から見た生命, 進化, 時間. 朝日新聞社.
- パース著 伊藤邦武編訳. (2001). 連続性の哲学. 岩波書店.
- バーバラ・ミント. (2006). 考える技術・書く技術 ワークブック. ダイヤモンド社.
- ブライアン・グリーン著 林一訳. (2001). エレガントな宇宙—超ひも理論がすべてを説明する. 草思社.
- ブライアン・グリーン著, 竹内薫(監修). (2011). 隠れていた宇宙. 早川書房.
- ペーテル・ヤーデンフォッシュ著, 井上逸兵訳. (2005). ヒトはいかにして知恵者となったのか—思考の進化論. 研究社.
- ポアンカレ著 河野伊三郎訳. (1938). 科学と仮説. 岩波書店.
- リンゼイ・J. ウェイリー著 大堀壽夫他訳. (2006). 言語類型論入門 言語の普遍性と多様性. 岩波書店.
- 演繹法・帰納法とは. (2018 年 9 月 18 日). 参照先: Mission Driven Brand:
https://www.missiondrivenbrand.jp/entry/thinking_deduction_Induction
- 宮本啓一. (2008). インドの「多元論哲学」を読む. 春秋社.
- 宮本啓一 石飛道子. (2003). ビックリ！インド人の頭の中—超論理思考を読む. 講談社.
- 橋本淳一郎. (2006). 時間はどこで生まれるのか. 集英社新書.
- 九鬼周造著 小浜善信編. (2016). 時間論. 岩波書店.
- 三浦俊彦. (2000). 論理学入門 推論のセンスとテクニックのために. 日本放送出版協会.
- 産業日本語研究会 ライティング分科会. (2017). ライティング分科会 活動報告. 一般財団法人日本特許情報機構: 産業日本語研究会活動報告.
- 時枝誠記著. (2017). 国語学史. 岩波書店.
- 松村道一著. (2002). 脳科学への招待 神経回路網の仕組みを解き明かす. サイエンス社.
- 城戸雪照. (2003). 場所の哲学—存在と場所—. 文芸社.
- 秦宏一. (2009). 英語動詞の統語法 日英語比較の新たな試み. 研究社.
- 浅野櫓英. (2018). 論証のレトリック 古代ギリシアの言論の技術. ちくま文芸文庫.
- 船橋新太郎, 渡邊正孝編集. (2015). 情動と意志決定 感情と理性の統合. 朝倉書店.
- 村松道一. (2002). 脳科学への招待 神経回路網の謎を解き明かす. サイエンス社.
- 大森壮蔵. (1994). 時間と存在. 青土社.
- 大森壮蔵. (1996). 時は流れず. 青土社.
- 中村元. (1988). 東洋人の思惟方法 I—インド人の思惟方法. 春秋社.
- 定藤規弘. (2019 年 9 月 19 日). 知覚. 参照先: 脳科学事典:
<https://bsd.neuroinf.jp/wiki/%E7%9F%A5%E8%A6%9A>
- 内井惣七. (2006). 空間の謎・時間の謎 宇宙の始まりに迫る物理学と哲学. 中公新書.
- 日本語マニュアルの会. (2018 年 11 月). 日本人のための日本語マニュアル(暫定第 1 版). 参照先:
<http://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/>
- 入不二基義. (2002). 時間は実在するか. 講談社現代新書.
- 飯田隆. (2019). 日本語と論理 哲学者, その謎に挑む. NHK 出版.
- 米盛裕二. (1981). パースの記号学. 勁草書房.
- 米盛裕二. (2007). アブダクション 仮説と発見の論理. 勁草書房.
- 豊田秀樹編著. (2015). 基礎からのベイズ統計学. 朝倉書店.
- 野家啓一. (2015). 科学哲学への招待. ちくま学芸文庫.
- 野矢茂樹. (2012). 心と他者. 中公文庫.